

平成24年7月18日

平成24年度病害虫発生予報第4号

長崎県病害虫防除所長

【予報の概要】

農作物名	病害虫名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
早期水稲	いもち病（穂いもち） 紋枯病 穂吸汁性カメムシ類	— やや少 やや多	並 やや少 やや多
普通期水稲	いもち病（葉いもち） 紋枯病 縞葉枯病 セジロウンカ トビイロウンカ（防除情報第9号） コブノメイガ（防除情報第9号）	並 並 並 やや多 並 少	並 並 並 やや多 やや多 やや少
大豆	ハスモンヨトウ	—	並
いちご （育苗床）	うどんこ病（防除情報第8号継続） 炭疽病（ <i>G.cingulata</i> ）（注意報第1号継続） 輪斑病 ハダニ類	やや多 やや多 やや多 並	やや多 やや多 やや多 並
アスパラガス	アザミウマ類	やや少	やや少
かんきつ	かいよう病 黒点病 ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	やや少 やや少 やや多 やや少	やや少 並 やや多 やや少
びわ	がんしゅ病 灰斑病 ナシヒメシンクイ	並 やや多 並	並 やや多 並
なし	ナシヒメシンクイ	並	並
ぶどう	べと病	やや少	並
果樹共通	果樹カメムシ類	並	並
茶	炭疽病 チャノキイロアザミウマ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ カンザワハダニ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	並 やや少 やや多 並 やや少 並 やや多	並 やや少 やや多 並 やや少 並 やや多

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

早期水稻

1. いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（41筆）の結果、葉いもちの発病株率は0.5%（0.9%）、発生圃場率は9.8%（14.0%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、葉いもちの発生を認めなかった（発生を認めない）。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（41筆）の結果、発病株率は0.0%（0.3%）、発生圃場率は2.4%（11.4%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は20.0%（15.4%）であった。

3. 穂吸汁性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬のイネ科雑草におけるすくい取り調査（24地点）の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は17.8頭（9.7頭）であった（表）。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくいとり当たり虫数						発生地点率	
	H20	H21	H22	H23	平年	H24	平年	H24
ホリカメムシ	0.4	0.3	0.3	0.4	0.4	0.7	57.1	79.2
クモカメムシ	0	0.1	0.06	0.1	0.06	0.6	8.1	25
シラホシカメムシ	0.1	0.1	0.2	0.1	0.2	0.5	30.9	50
アカシカメムシ	10.8	4.6	7.9	9.6	8.5	15.9	72.2	87.5
ミナミアカメムシ	0.02	0.03	0.01	0	0.02	0	3.6	0
計	11.3	5.2	9.5	9.9	9.7	17.8	83.9	91.7

注) 数値は10回すくい取りあたりの虫数

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降の水田周辺の雑草地を除草すると本田へのカメムシ類の侵入を助長するので行なわない。

イ 本田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布すると効果が高い。また、周辺雑草地も含めて広域一斉防除を行うと防除効果が高まる。

ウ ミナミアカメムシは斑点米を発生させる能力が高いので圃場での発生に注意する。また一部の薬剤で感受性の低下が報告されているので、薬剤の選定にあたっては十分注意する。

1. いもち病 (葉いもち)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(89筆)の結果、発病株率は0.2%(0.1%)、発生圃場率は1.1%(2.1%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

ウ 7月以降、葉いもちの感染に好適な条件を満たした日が7月4日に南島原市口之津で、7月2、15日に壱岐市芦辺で認められた(葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 余り苗、補植苗は発病の伝染源となるので早めに処分する。

イ 葉いもちの急性型病斑が見られた場合は早急に防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(89筆)の結果、発生を認めなかった(発病株率0.0%、発生圃場率0.8%)。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(89筆)の結果、発病株率は0.0%(0.0%)、発生圃場率は1.1%(1.7%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

ウ 7月上旬の巡回調査(89筆)の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.01頭(0.06頭)、発生圃場率は7.9%(17.2%)であった。

エ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、ヒメトビウンカの寄生を認めなかった(寄生株率1.3%、株当たり虫数0.01頭)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は伝染源となるので見つけ次第抜き取る。

イ ヒメトビウンカの圃場での発生に注意する。

4. セジロウンカ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(89筆)の結果、セジロウンカの株当たり虫数は0.7頭(1.0頭)、発生圃場率は78.7%(67.7%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、株当たり虫数は6.3頭(2.7頭)、寄生株率は96.0%(66.0%)であった。

ウ 7月1~3半旬にかけてやや多い飛来が認められた。

エ 向こう1ヶ月の気温は高い見込みであり本虫の発生に好適である。

5. トビイロウンカ

平成24年7月18日付け**病害虫発生予察防除情報第9号**による。

6. コブノメイガ

平成24年7月18日付け**病害虫発生予察防除情報第9号**による。

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は平年並である（図）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に薬剤散布する。

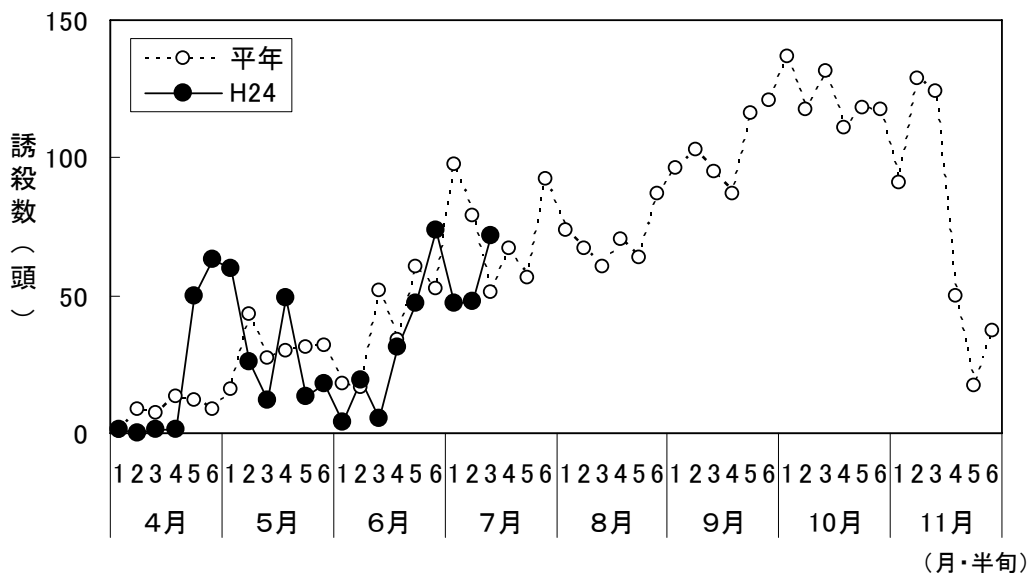


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況（諫早市小船越町）
平年：H14～23年の平均値（最大・最小値除く）

いちご(育苗床)

1. うどんこ病

平成24年7月5日付け**病害虫発生予察防除情報第8号**を継続。

なお、その後の発生状況については以下のとおりである。

(1) 発生状況

7月上旬の巡回調査（33筆）の結果、発病株率は5.3%（3.1%）、発生圃場率は48.5%（35.6%）であった。

2. 炭疽病 (*G. cingulata*)

平成24年7月5日付け**病害虫発生予察注意報第1号**を継続。

なお、その後の発生状況については以下のとおりである。

(1) 発生状況

ア 7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は0.0%(0.0%)、発生圃場率は3.0%(2.3%)であった。

イ 病害虫防除員の報告によると、やや多の発生であった。

3. 輪斑病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は9.1%(3.5%)、発生圃場率は48.5%(29.7%)であった。

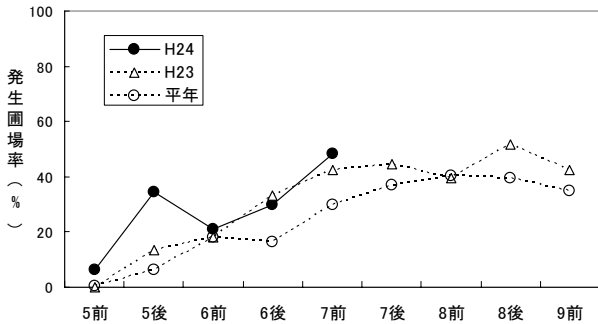


図 輪斑病 発生圃場率の推移

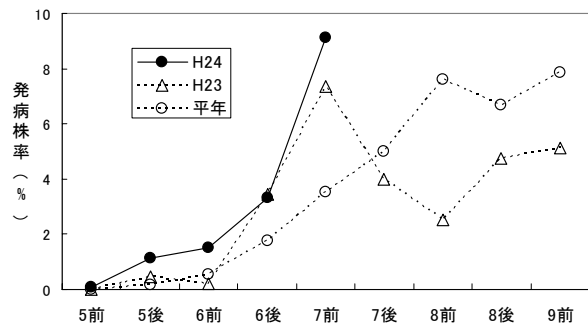


図 輪斑病 発病株率の推移

(3) 防除上注意すべき事項

ア 罹病葉は伝染源となるため栽培上支障のない範囲で除去する。また、除去した罹病葉は圃場周辺に放置しない。

イ 肥料不足は発病を助長するので留意する。

ウ 過湿条件は発病を助長するので、密植を避け、通風を良くする。

4. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、寄生株率は0.8%(0.8%)、発生圃場率は9.1%(9.1%)であった。

アスパラガス

1. アザミウマ類

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(9筆)の結果、払い落とし虫数(10.5cm×22.5cmの白色板に5回×10ヶ所)は2.6頭(過去5カ年平均14.6頭)、発生圃場率は77.8%(過去5カ年平均80.0%)であった。

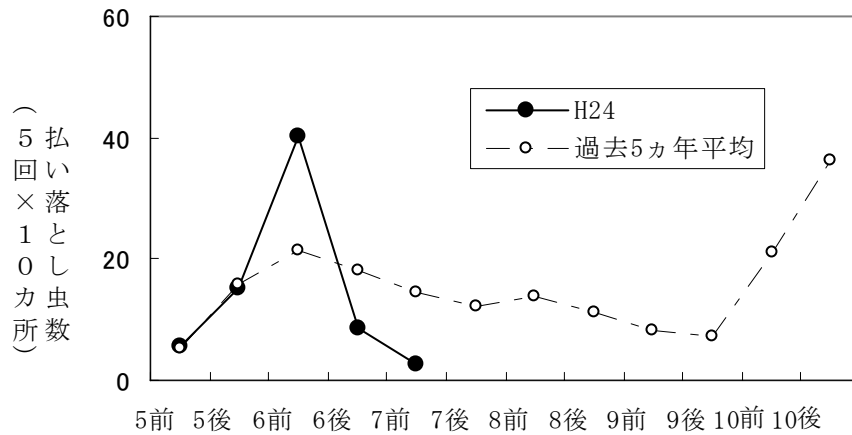


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移 (巡回調査)
※払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

かんきつ

1. かいよう病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(36筆)の結果、葉及び果実での発生を認めなかった(発病葉率0.6%、葉の発生圃場率26.3%、発病果率0.1%、発生圃場率26.3%、果実の発生圃場率6.8%)。

2. 黒点病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(36筆)の結果、発病果率は0.5%(1.0%)、発生圃場率は5.6%(14.7%)であった。

イ 6月中～下旬の降雨が多かったため、果実の感染が多かったと考えられる。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(36筆)の結果、寄生葉率は16.3%(9.9%)、発生圃場率は58.3%(48.1%)であった。

4. チャノキイロアザミウマ

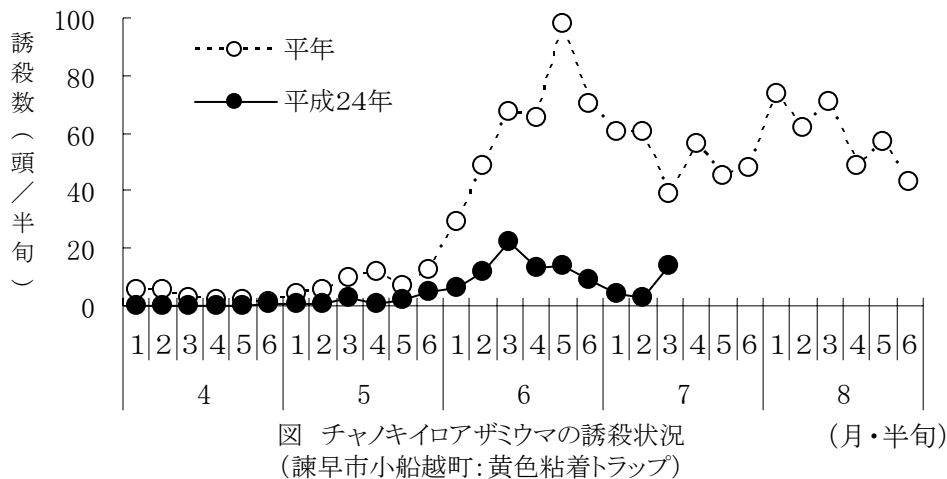
(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(36筆)の結果、果梗部の被害果率は0.1%(0.8%)、発生圃場率は2.8%(13.1%)であった。

イ 黄色粘着トラップ(諫早市)による誘殺量は、平年より少なく推移している(図)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 下表の予測発生ピーク日5日前から発生ピーク日に薬剤散布をすると防除効果が高い。

イ ただし、発生が多い園では、1果当たりの寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

ウ 茶、かき、ぶどう、イヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 チャノキイロアザミウマ発生予測プログラムによる成虫の予測発生ピーク日

地点	長崎	佐世保	大瀬戸	口之津	平戸	長崎 (平年値)
第4世代	7/20	7/20	7/29	7/19	8/2	7/20
〃 (前年)	7/22	7/22	8/1	7/22	8/4	—
第5世代	8/6	8/6	8/16	8/6	8/20	8/5
〃 (前年)	8/8	8/8	8/20	8/8	8/22	—
標高(m)	27	4	43	10	58	27

注1) 気温データは各地域のアメダスデータにより平成24年7月16日時点で算出し、7月17日以降は平年値を使用した。

注2) 同一地区内でも、標高や土地条件で予測発生ピーク日が異なる場合があるので注意する。

び わ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は1.8%(1.2%)、発生圃場率は50.0%(41.3%)であった。

2. 灰斑病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は48.0%(26.8%)、発生圃場率は100%(97.5%)であった。

3. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（10筆）の結果、発生を認めなかった（過去10か年の平均寄生枝葉率0.0%、発生圃場率2.0%）。

イ フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は、概ね平年並で推移している（図）。

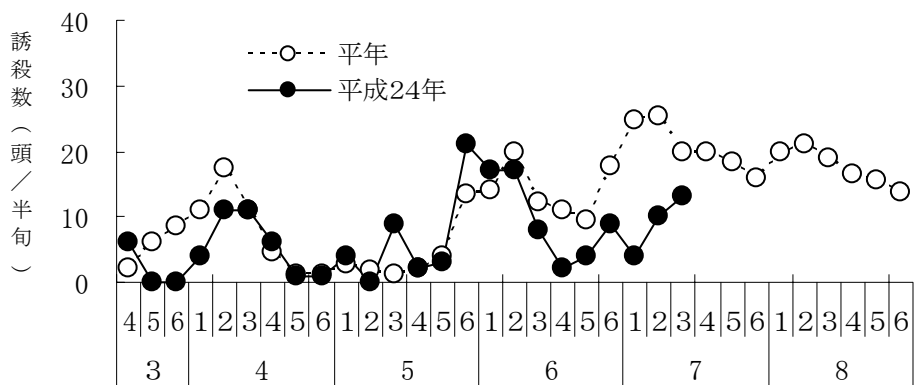


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況 (諫早市小船越町:フェロモントラップ) (月・半月)

なし

1. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は、概ね平年並で推移している（びわの項参照）。

ぶどう

1. ベと病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（12筆）の結果、発病葉率は0.1%（2.1%）、発生圃場率は16.7%（21.9%）であった。

イ 昨年の発生が多かったため、病原菌の越冬量は多いと予想される。

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

各地区のフェロモントラップの誘殺量は平年並、予察灯の誘殺量は平年並～やや少なくて推移している（図）。

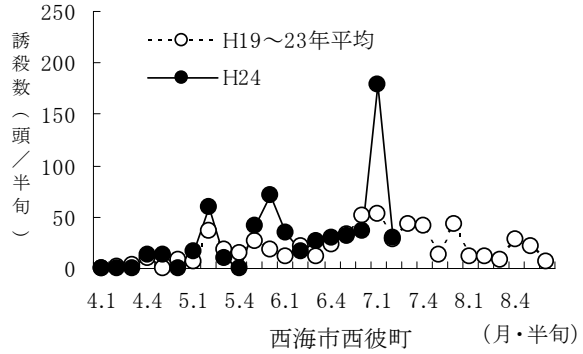
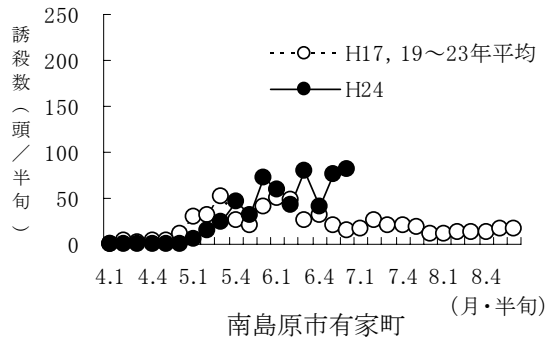
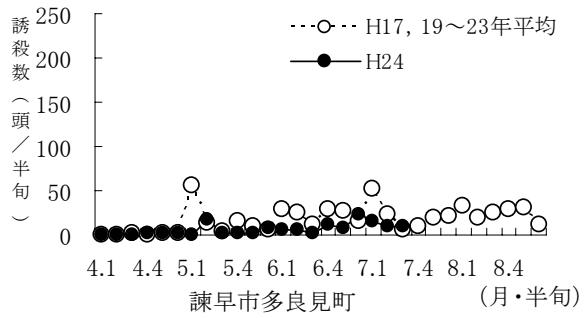
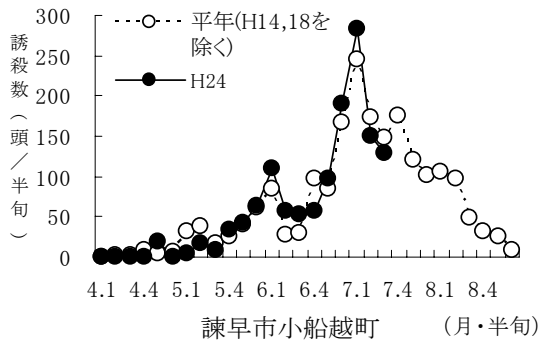


図 フェロモントラップによるチャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況 (黄色コガネコール)

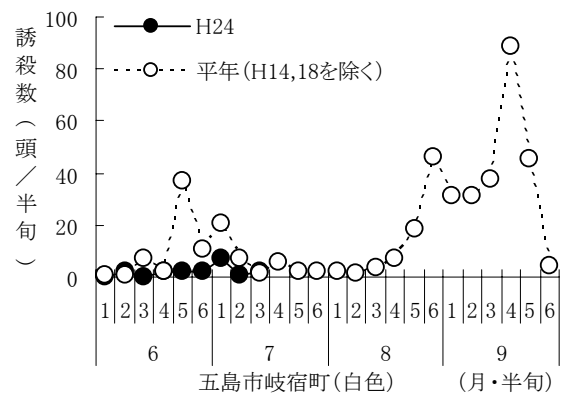
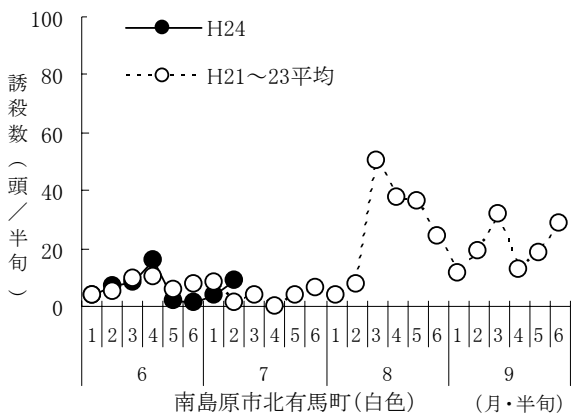
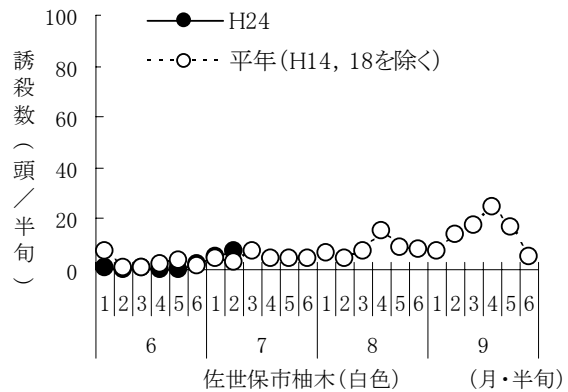
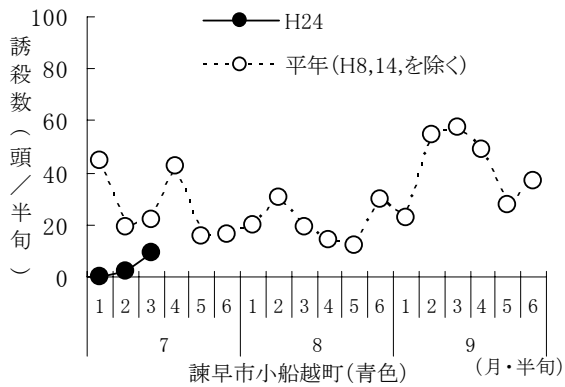


図 予察灯によるチャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、1㎡あたり発病葉数は6.0枚（4.6枚）、発生圃場率は40.0%（55.6%）で、一部多発圃場が見られた。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は5.9頭（12.2頭）、発生圃場率は65.0%（77.5%）であった。

3. チャノココクモンハマキ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、1㎡当たり巻葉数は0.7枚（0.1枚）、発生圃場率は15.0%（13.1%）で、一部多発圃場が見られた。

イ フェロモントラップによる誘殺量（農林技術開発センター茶業研究室調査）はやや多く推移している（図）。

(3) 防除上注意すべき事項

発蛾最盛期から7～10日後に薬剤散布すると効果が高い。

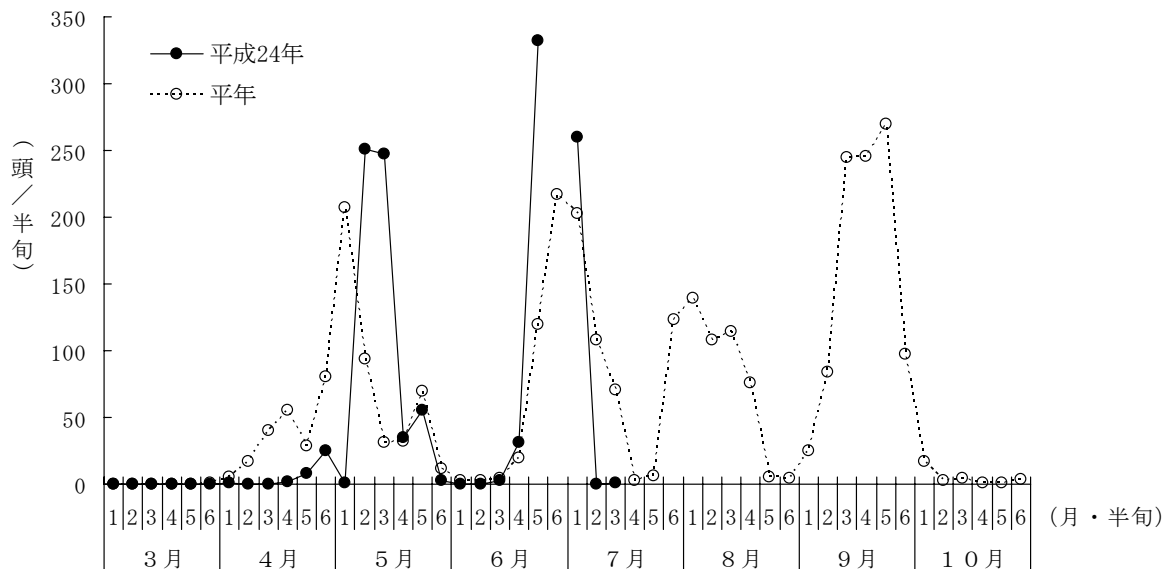


図 チャノココクモンハマキの誘殺状況（東彼杵：フェロモントラップ）

注）6月6半旬は欠測

4. チャノホソガ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、1㎡当たり巻葉数は0.3枚（0.0枚）、発生圃場率は15.0%（4.4%）であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量（農林技術開発センター茶業研究室調査）は平年並

で推移している（図）。

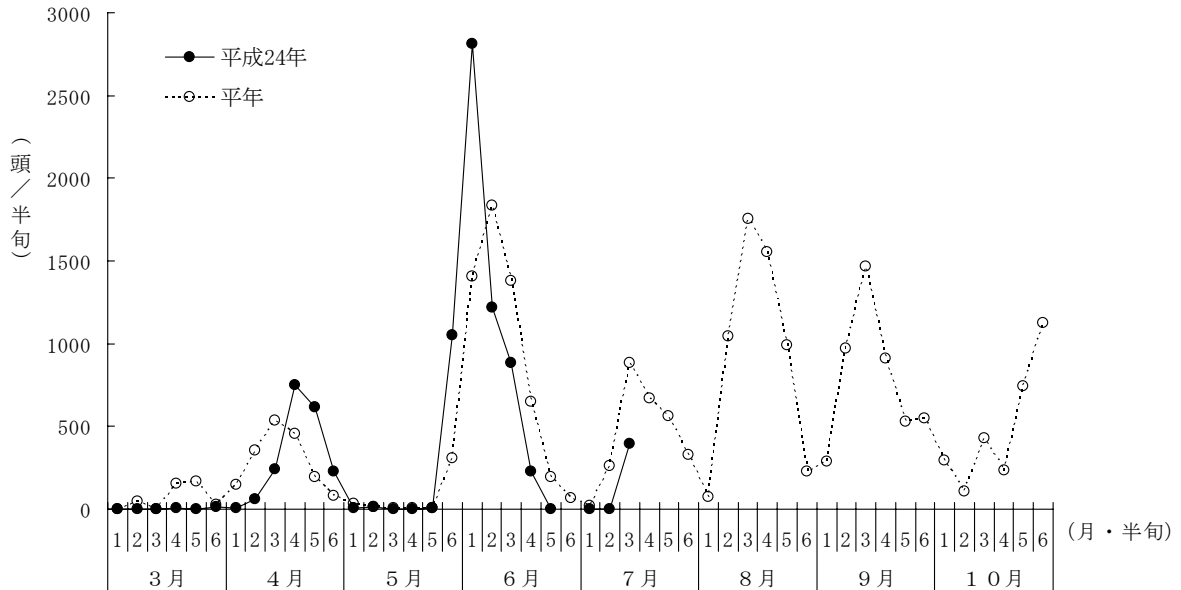


図 チャノホソガの誘殺状況（東彼杵：フェロモントラップ）
注）6月6半旬は欠測

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、発生を認めなかった（寄生葉率0.3%、発生圃場率11.3%）。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は1.7頭（1.9頭）、発生圃場率は45.0%（50.6%）であった。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、寄生株率は8.5%（4.8%）、発生圃場率は45.0%（34.4%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表のふ化盛期予測日を中心に防除する。なお、独自にふ化盛期日を現地調査し防除適期を判断している地域ではその判断を優先する。

イ 株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。

表 「有効積算温度則による防除適期予測法」によるクワシロカイガラムシのふ化盛期予測日（第2世代）

地点名	標高	平成24年	平成23年	平成22年	平成21年
東彼杵町太の原	360m	7/25	7/27	7/27	7/25
五島市上大津	77m	7/17	7/19	7/16	7/13

- 注1) 方法は「有効積算温度則による防除適期予測法（農林技術開発センター茶業研究室）」により、7月17日時点で予測した。
- 注2) 使用する気温データは、農林技術開発センター茶業研究室（東彼杵町）の測定値及びアメダスデータ（五島市）を使用し、予測日以降の気温データは平成23年測定値を使用した。
なお、第1世代のふ化盛期を、東彼杵町太の原：5月22日、五島市上大津：5月14日とした。
- 注3) 同一地区内でも標高や土地条件でふ化盛期日が異なるので注意する。

【参考】

気象

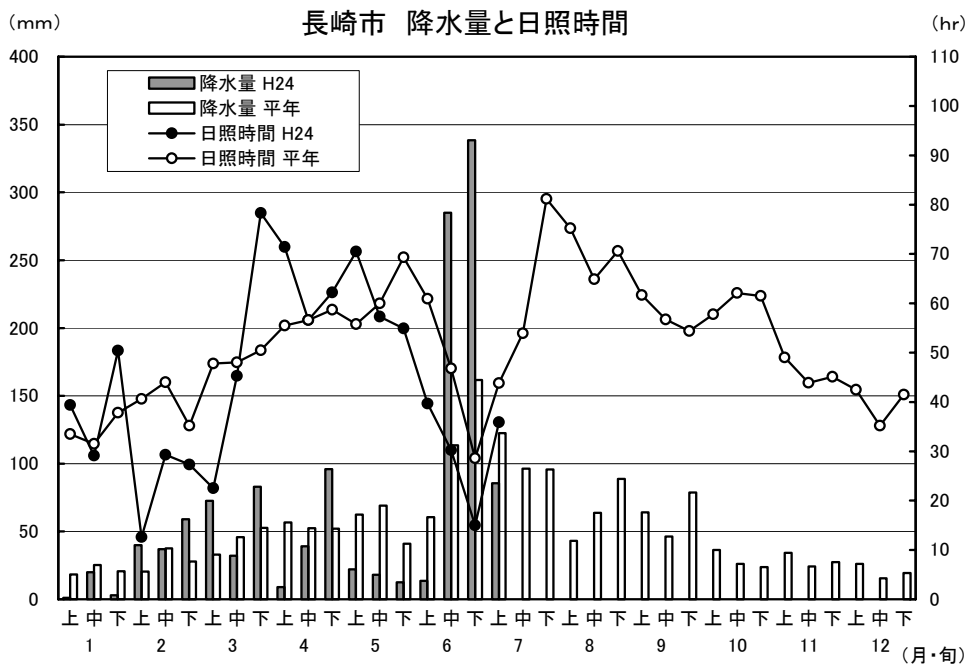
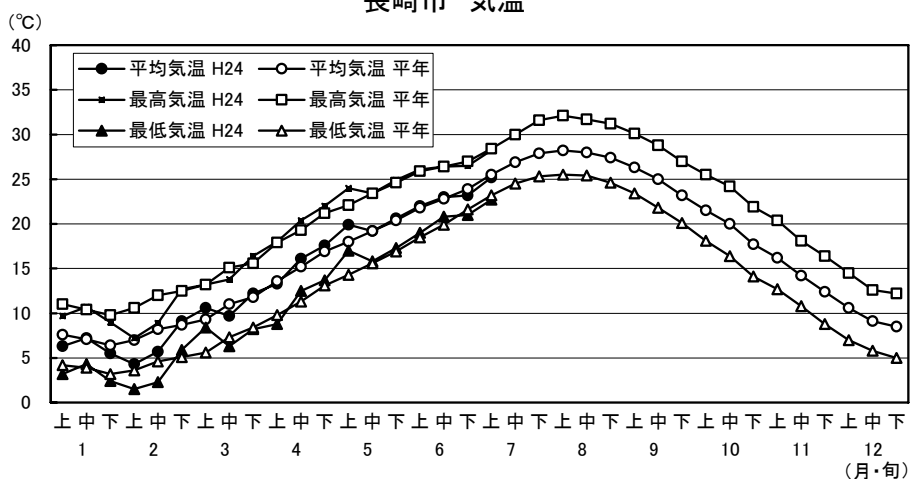
(平成24年7月13日発表 1か月予報 福岡管区気象台)
要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	30	40
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

※予報対象地域：九州北部地域

平成24年の気象経過（長崎海洋気象台）

長崎市 気温



○6月1日から8月31日までの3ヶ月間を「農業危害防止期間」と定め、農業事故を防止する運動を実施しています。

○病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。

「防除所ホームページ」 アドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/nagasaki/>

○この情報に関するお問い合わせは、電話でお願いします。

長崎県病害虫防除所 TEL：0957-26-0027